

社会関係資本と賃金労働者階級の貧困

——社会関係資本論が抱える諸問題——

ラジュ・J・ダス*

(若松 司** 訳)

Raju J Das, 2004

Social capital and poverty of the wage-labour class:
problems with the social capital theory

Transactions of the Institute of British Geographers NS 29 pp.27-45

摘要

互酬の規範や協同生活として理解される社会関係資本は、世界規模の貧困軽減にむけた下からのアプローチを提供すると考えられている。世界銀行によると、社会関係資本は長期発展のための必要条件であり、貧困者の資本である。本稿では、多くの研究が、貧困者に社会関係資本がもたらす利益を過信していることを論じる。もちろん社会関係資本がどの程度貧困者の助けになるのかを調べることは重要である。しかし貧困者の条件が、かれらの社会関係資本にどのように影響するのかも検証するに値する重要なことがらであり、このことは社会関係資本が開発の新しいパラダイムであることを証明するのに忙しい、多くの研究者によってしばしば無視されてきた。インド東部にある Orissa の二つの農村地域でおこなった質的インタビューに基づいて、本稿では日雇労働者階級の貧困者がその社会関係資本から利益を得ているのかどうか、そしてそれはどの程度なのかを検証する。続いて、貧困者が生活している経済・政治的諸条件およびこれら諸条件の空間性が、社会関係資本の生産に影響をあたえるメカニズムを明らかにする。社会関係資本と貧困の弁証法的関係を解明しようとすることによって、社会関係資本にかんする過度に楽観的な主張を問題視するというのが、本稿のねらいである。貧困者の経済・政治的諸条件が、貧困者のための社会関係資本そのものおよびそこから想定される物質的利益にたいして大きな制約的効果をもっているので、社会関係資本を独立変数とし貧困を従属変数と自明視することは支持できない。

キーワード：社会関係資本、賃金労働者、貧困、不確実さ、インド

はじめに

社会関係資本は貧困軽減にむけた下からのアプローチを提供すると言われている(Woolcock 1998)。世界銀行がいうには、社会関係資本は長期発展のための必要条件であり、貧困者の資本である(World

Bank 2001, 129)。本稿は、社会関係資本に関する研究の多くが、その貧困者のための利益を過信していることについて論じる。もちろん社会関係資本——互酬の規範、ネットワーク／アソシエーション——がどの程度、貧困者を支援できるのかを調べることは重要である。しかし貧困者の諸条件がどのように

* ダンディ大学 (現ヨーク大学・助教授)

** 大阪市立大学・院

社会関係資本に影響を与えるのかも同じく検証に値する重要なことである。このことは社会関係資本支持者 *social capitalist* によってしばしば無視されてきた。本稿では、インド東部の二つの村落での質的なインタビューに基づき、そして貧しい日雇労働者 *daily wage labour* に注目しつつ、賃金労働者 *wage labourer* が社会関係資本から利益を得る程度だけでなく、その経済・政治的条件が社会関係資本に影響を与えるメカニズムをも検証する。社会関係資本に関するあまりにも楽観的な主張、とくに *Robert Putnam*(1993)——その概念の一般化にもっとも寄与した人物——の「共同体主義的な」社会関係資本を問題視することが本稿の主なねらいである。

つぎの節では最初に、自分の研究のコンテキストを設定するために社会的排除や貧困に関する研究を簡潔に再検討する。続く二つの節では社会関係資本に関する経験的資料を扱う。第二節では、賃金労働者家族間での互酬の規範と実践、すなわちかれらの「結合型社会関係資本 *bonding social capital*」を論じる。第三節ではかれらの協同生活、すなわち「橋渡し型社会関係資本 *bridging social capital*」を検証する。結論の節では社会関係資本の研究に立ち戻り、それを本稿の経験的な議論と関連づけることにする。

本稿の経験的コンテキストはインドの *Orissa* 州である。インドの政治経済のなかでも、とくに貧困労働者の諸条件の政治経済はかなりの程度、インドの所有者エリート（都市の資本家、大土地所有者、最高位の行政官僚）の構造的権力および戦略的行為によって、そしてインド社会の労働大衆の行為によって条件付けられている (*Bardhan 1998; Das 1998*)。しかしインドの政治経済のこの性格づけでは、少なくとも地理的な観点からは不十分であることがわかるであろう。インドの政治経済の（とくに州の間にある）地域的差異——とくに、より貧しい階層をエンパワーメントする空間がどの程度、公的で民主的な機構の中で開放されているのか——に関する重要な報告がある。 *Corbridge and Harriss*(2000) は、インドの地域政治経済とも呼べるものの素晴らしい類型学を提供してくれている。タイプ 1 には、低位のカーストや階級が政治体制においてより強く現れている西ベンガルのような州があてはまる。タイプ 2 には、中間のカースト／階級が州レベルの統

治を支配している一方で、比較的低位の階級もある程度、行政から利益を得ている州（たとえば *Andhra Pradesh*）があてはまる。タイプ 3 には二つのサブタイプがある。一方のサブタイプは、上流カースト／階級の支配が中流のカースト／階級の異議申し立てを受けている州（たとえば *Bihar*）である。もう一つのサブタイプは、上流のカースト／階級が政治体制を支配し、低位の階級にはエンパワーメントするための空間がほとんどない州である。 *Corbridge and Harriss* によると、 *Orissa* はおそらくインドの地域政治経済のこのサブタイプにほぼ該当する¹⁾。 *Orissa* はたしかにインドの貧困〔地域〕が連なって形成されている巨大地帯の一部である。この地帯の貧困者は経済的に貧しい (*Das 2002*) ばかりでなく、他の地域の貧困者と比べても一層、政治的な権利を与えられていない。このような状況があれば、貧困者がそこでどのような生活をしているのか、たとえばかれらはどのようにして「社会関係資本」を目的に適うように用いているのか、そして貧しい労働者階級の人びとが協同生活、より一般的には「市民社会」——それはかれらの（将来の）政治的エンパワーメントにおいて重要な役割を担いうる——を進展させる試みに対して、 *Orissa* の政治経済はどのような障壁であるのかを知ることは興味深いであろう (*Corbridge and Harriss 2000, 224*)。

Orissa で得た経験的な資料は、その州の二つの村落クラスター (*Gram Panchayats* [以下「村」と訳す]) での 71 の深層面接調査法によるインタビューおよび賃金労働者やその他（たとえば政治家）との 7 つのフォーカスグループ・ディスカッションである (図 1)。村落クラスターの主要な選択基準は、労働者階級の政治的連帯の地域史である。 *Janpur* 地区の *Chasakhanda* 村では、労働者階級の政治的連帯のレベルは *Balasore* 地区の *Remuna* 村よりもはるかに低く、そのことはその左派政党の選挙での存在感がきわめて弱いことに部分的に示されている (表 1)。 *Chasakhanda* をその一部とする州議会の選挙区のレベルにおいても *Chasakhanda* 村それ自体のレベルにおいても、政治権力は中道／中道・右派の政治家の手中にあり、村内に労働者階級の連帯は存在しない。 *Remuna* 村には、ある左派政党〔インド共産党 (マルクス主義)、あるいは *CPM*] によって組

織された農民／労働者運動の伝統がある。この地域はある左派政治家を州の立法議会に選出する議会選挙区の一部である。たしかに彼は Remuna 村の住民である。選挙に当選した Remuna 村長もまたインタビュー時には CPM の所属であった。また Remuna は Chasakhanda よりも 1000 人あたりの市民組織の数ははるかに大きい。Remuna は Chasakhanda と同様におもに未灌漑の農地に依存している農村地域である。しかし、Chasakhanda とちがい、Remuna の住民のなかには近くの工場で働いている者もいる。経済発展の点で見ると、さまざまな農産物に示されているように、Chasakhanda よりも比較的ましな地域なのである。フィールドワークは 2001 年 12 月～2002 年 4 月と 2002 年 12 月 6 日～2003 年 1 月 10 日に研究アシスタント 2 人の助けを得て行なわれた。回答者の大多数は日稼ぎ被雇用者 *daily wage earner*²⁾ の階級である。この階級から回答者を選ぶときには、かれらがさまざまな階層を代表するように配慮しておこなった（たとえば農業従事者と農業以外の就業者）。さらに、異なる政治政党に所属する政治家や異なる地理的スケール（村、村落クラスター、開発区）の行政職員と同様に、土地所有者——かれらは労働者階級と日常的に交流のある人びとである——にもインタビューした。インタビューに応じた政治家や行政職員のなかには、労働者が助けになるだとか墮落し搾取的だと言及する者も含まれている。

回答者の大多数は実際に普段から他の回答者と付き合いのある人びとである（州の職員 *state official*、政治家、貧しい労働者）。かれら回答者の選択は調査が進み、かれらのうちけた仲間内の理解が深まっていくごとにおこなった（Sayer 2000, 20 を参照）。わたしの目的は、社会関係資本に関連する数多くの属性や問題について少人数の個人にインタビューして、賃金生活者が生活している経済-政治的諸条件と社会関係資本とを結びつける因果的メカニズムを解明することである。賃金労働者の集団は、かれらが普段出会うコミュニティセンターや学校、崇拜の場所といった場所に招かれた。インタビューの平均時間は 40 分。インタビューの間は社会関係資本と貧困に関する研究に基づいた質問群が議論を促すために使用された。インタビューは Oriya 語で行なわれ

た。著者は書き起こしの大半を翻訳したが、プロの翻訳家に翻訳してもらった部分——著者はその訳を一通りチェックしている——もある。

社会関係資本と貧困の研究：簡潔な再検討

社会関係資本は、協働的な活動を促進し互恵のための社会資源として利用できる互酬の規範やネットワーク／アソシエーションにかかわっている（Putnam 1993, 167 2000; Woolcock 2000³⁾）。まずは互酬とアソシエーションを扱うことにしよう。

互酬には二つのタイプ——特殊なもの（均衡のとれたものとしても知られている）と一般化されたもの——がある（Putnam 1993, 172）。特殊な互酬は等価物の同時交換に関するものである（たとえば同僚間での祝日の贈り物の交換）。一般化された互酬——ここでは利害関心の互酬——は、「限られた時間内においては報われることのない、あるいはバランスを欠いた持続的な交換関係」のことである（Putnam 1993, 172）。一般化された互酬の個々の活動（その後の互酬）は通常、短期間の利他的行為と長期間の自己利害の結合によって特徴づけられる。つまり「いつかわたしを援助してくれるだろうと期待して（おそらく曖昧かつ不確かで、計算に入れることのできない）、わたしは今あなたを援助する」（Taylor in Putnam 1993, 172）。互酬の規範は自己利害や連帯の一致に供する。この規範は社会関係資本のかなり生産的な形態である、と Putnam は言う。互酬は、人びとが経済的不確実さ *insecurity* に取り組むのを支援する自助アソシエーションの中核にある。この互酬ネットワークの一部として、人びとは労働、資本、消費財を交換するのである（Putnam 1993）。

社会関係資本の第 2 の要素は、同等の社会-経済的地位の人びとの間にある市民的関与のネットワーク——個人間のコミュニケーションや交換のネットワーク——である（Putnam 1993, 172-6）。これは水平的なアソシエーションとしても知られている（パトロン-クライアント関係に例示されるような垂直的なアソシエーションと対置されるものとして）。近隣のアソシエーションや協働組合 *cooperatives*、スポーツクラブ、大衆政党のような市民的関与は水平的

な相互作用を表現している。Putnam はそのイタリア研究に基づいて、このネットワークが成員間の互酬の規範を育て、信頼性に関する情報の流通を促進し、退会の潜在的なコストを高め、成員に互恵のための協働を支援することを示している (Putnam 1993, 173-4)。より多くの社会関係資本を有する地域はより大きなレベルの経済発展を有している、と彼はいう。先進国や発展途上国における工場間の関係や新しい産業空間に関する地理学的研究もまた、信頼、根付き、ネットワークという概念——これらはすべて社会関係資本概念の一部である——を用いている (Molina-Morales et al. 2002; Buck 2000; Pinch and Henry 1999; Christerson and Lever-Tracy 1997; McDade and Malecki 1997; Gertler 1995)。この研究は、一般に社会関係資本の研究と同様に、まさに「経済と社会は根深いところまで絡み合っている」ことを示唆している (Thrift and Olds 1996, 314; Biggart and Castanias 2001 も参照のこと)。しかし Putnam の個人間関係の研究も工場間関係の地理学的研究も階級の問題だけでなく、それに関する経済的再分配の問題、たとえば貧困やこれに類する問題を無視するか、あるいはリップサービスにとどまる傾向がある。ゆえに本稿では、賃金労働者階級社会関係資本と貧困の関係を探究する。

Putnam の 1993 年の著作の出版以来、社会関係資本と貧困に関する研究は発展し、そこで社会関係資本の類型学が発達してきた。この類型学においては、貧困者との関係でさまざまなタイプの社会関係資本——結合型社会関係資本と橋渡し型および連結型 linking のそれ——が存在する (World Bank 2001; Gittel and Vidal 1998)⁴⁾。

「結合型社会関係資本」とは、類似の人口学的な特性を共有している家族成員、近隣、親しい友人を結びつける強力な紐帯のことである (World Bank 2001, 128)。互酬の規範や相互扶助は強力な紐帯をもつ人びとの間で強くなる傾向がある。他方において、市民組織——クラブや自発的アソシエーションを含む——の成員間の弱い紐帯が「橋渡し型社会関係資本」を構成する (Gittel and Vidal 1998)。橋渡し型社会関係資本とは水平的な結びつき、換言すれば「幅広いので比較可能な経済状態や政治権力」を

有しているが、さまざまな人口学的、民族的、地理的バックグラウンドを有する人びとの結びつきのことである。貧困者の社会関係資本のこの形態は、少なくとも部分的にはかれらの協同生活によって創出される (たとえばさまざまな職業や近隣の人びとが参加するクラブ)。

貧困者は数多くの結合型社会関係資本をもっているが、橋渡し型社会関係資本はあまりもっていないという研究者もいる (World Bank 2001; Holzmann and Jorgensen 1999)。つまり典型的には、ある場所の貧困者はその場所にいる自分と同じような人びとはたくさん知っているが、他の場所の人びととの結びつきはあまりないということである。結合型社会関係資本と橋渡し型のそれは概ね (完全に正確なものではないが)、上述の社会関係資本の互酬的・ネットワーク的要素に一致する (Woolcock 2000, 11 を参照)。

社会関係資本のどちらの形態も潜在的には貧困者に利益をもたらす。結合型社会関係資本——家族成員や近隣といった社会集団を結びつける強力な紐帯——は不幸が訪れたときに「即座に実行される支援」を提供する。それは非公式のセイフティネットの一資源である (Narayan and Pritchett 1999, 284)。「わたしたちが欲しかったり必要としたりするものの多くは自分たちの努力だけでは生み出すことができない」という意味において「社会的関係は互酬を通じて価値を創出する」と Uphoff (2000, 226) はいう。Kennedy et al. (1998) の研究は、友人や家族からの支援という形の社会関係資本を失ったロシアの人びとは、今日の市場経済への移行によって引き起こされた経済的窮乏に対して一層脆弱になる傾向があることを明らかにしている。Kozel and Parker (1998) は、北インドの地方では貧しい農村住民の社会集団が、欠くことのできない重要な防衛、リスクマネジメント、紐帯の機能を提供していると報告している。

他方において橋渡し型社会関係資本は、貧困者がそれによって集合的活動を必要とする問題 (たとえば道路の整備) に取り組む強力な手段でありうる。世界銀行が言うには「社会的ネットワークや社会組織は、リスクや機会を管理するときに貧困者が当てにするさまざまな資源の束のなかでもきわめて重要な資産なのである」 (2001, 129)。富裕者はクラブや

アソシエーションを通じてその利害を発展させていくが、しかし「その相対的な重要性は貧困者にとっての方が大きい」(2001)。このような意味において社会関係資本は貧困者の資本であると論じられるのである。Narayan and Pritchett(1999)はたしかに協同生活(たとえばアソシエーションの密度)と所得の正の相関を提示している。さらに詳細に言えば、かれらは村において協同生活という形社会関係資本が増大すると、所得も20パーセントまで上昇するとしている。協同生活は、情報の共有やコミュニティの問題に取り組むための協働を促進することによって貧困を軽減する。こうしてPutnamの社会関係資本論(p. 276)の強力な支持を提供している。しかしながら、この研究は統計上の相関が因果関係を含んでいるのかどうかを十分に明確にしていない。つまり、その研究が想定しているよりもはるかに、因果性の方向に問題があるかもしれないのである(Fire 2002)。

結合型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本の概念的な区別は、ある程度、社会関係資本と貧困の関係を明確にするという問題に取り組んできた。しかしその研究にはいくつかの問題がある。それらは世界銀行自体や銀行以外の学術研究者によって理解されてはいる。たとえば社会関係資本は、より裕福な集団の資源の要求があまり裕福でない集団の重荷になるということを引き起こしかねない——つまり集団のメンバーシップから生じる社会関係資本は集団の成員にのみ利益をもたらす、全体としての社会に利益をもたらすことはない、など——。これらの問題は地理学者やその他の研究者によって広範にわたって論じられている。ゆえに、ここでそれを繰り返すようなことはしない(Harriss 2002; Mohan and Mohan 2002; Fine 2001; DeFilippis 2001 2002; Harriss and De Renzio 1997を参照のこと)。わたしが扱うのは次のような問題ただ一つである。すなわち社会関係資本と貧困の因果的關係は、Putnamや世界銀行の研究員を含めた彼の追随者が考えているよりもずっと弱い、ということである。というのは一つに、社会関係資本支持者の多くは、相互支援、すなわち社会関係資本の重要な側面の一つが「狭隘でしばしば危険なくらい個人化された者同士のもたれ合い」(Levi 1996, 51)を意味しかねないことを認

識し損なっているからである。この批判は先に言及された地理学におけるビジネスネットワークの研究の多くにも適用される。このように、社会関係資本は物的な資本よりも重要になりうるというPutnamの主張(1993, 183)は、かなり問題を含んでいる。

本稿の立場からより重要なのは、わたしが指摘する次の点である。すなわち、社会関係資本を楽観的に主張する人びとはしばしば、人びとが生計を立てている条件——手短かにいえばその階級的地位——がどのようにして社会関係資本それ自体の生産の条件を蝕むことになるのかを考察し損ねているのである。社会関係資本へのアプローチを合理的な選択と捉えるPutnam(1993, 178, 163-4)は、協働活動にたいする障壁は人びとが利己的であることだけだと示唆しているように思われる。このようなアプローチは、圧力をかけてくる諸条件が互酬を含めた協働的行動の発現を妨げるという事実を無視している。こうしたことが実際にあることを概念的かつ経験的に示す研究は、今のところは少ないけれども増えつつある(Beall 2000)。本稿はそうしたアプローチ、換言すると非還元主義的な政治経済学、あるいは階級に基づいた社会関係資本へのアプローチに貢献しようとするものである。それは、経済-政治的諸条件がどのようにして社会関係資本の生産を可能にしたり、より強力に制約したりするのかを明らかにし、そうすることによって貧困の軽減において社会関係資本が果たす因果的役割の可能性——多くの社会関係資本支持者がそれに割り当てる可能性——を限定するだろう。

一方において、労働者階級の人びとの生活条件が社会関係資本の生産に役立つことがある。Portesは社会関係資本の四つの資源を同定している。第一は「結束の固い連帯 bounded solidarity」(Portes and Landholt 2000, 534)である。この連帯は、同じような困難な状況に直面している労働者階級(そしてその他の集団)の成員の間に湧き出てきたわれわれ意識という感情に基づいている。コストと利益の合理的な計算よりもむしろ道徳的な命令に基づいた感情である(Portes and Sensenbrenner 1993, 1327-8; Callinicos 1988, 199-203)。

もしこの湧き出てきた感情が十分に強いものであれば、一つの資源として各々の目的にしたがって諸個人が

流用できる相互支援の規範[たとえば贈り物の交換]を遵守することにつながるだろう。

(Portes and Sensenbrenner 1993, 1325)

労働者階級の人びとの生活条件が社会関係資本に貢献しうる一方で、社会関係資本を制約しうる条件も存在する。社会関係資本という形態をとる社会的資源の蓄積と性質がもつ階級的特質に底流する根本的な問題のひとつは、労働者階級が物的資源（とくに生産手段）から排除され、相対的に剥奪されているという事実である。かれらの階級の地位を考慮すると、労働者自らの間で共有すべき物的資源には限りがある。資源がなければ、共有に関するインフォーマルな規則を（活発な形態で）ある場所において、また空間を超えて長期間持続させることは困難である⁹⁾。さらに自助や相互扶助はある程度の確実さ security の期待、つまり困難な状況にあるときには他人との関係が保険として作用して、助けを得ることができるという期待に基づいているのである。しかし労働者階級の生活の根本的な側面は不確実さであり、単なる物的資源からの排除ではない。生産手段から切り離されているがゆえに、一般に生存手段へのアクセスは賃金労働を確実なものにすること——しかしながら保障されているわけでない——に依存しているのである。週末をどのようにやり過ごせばいいのかわかる由もない。労働者階級の不確実さは、確実さの感覚を前提とする自助や互酬の規範を再生産するための諸条件を蝕む可能性がある。

このように階級／貧困は社会関係資本に貢献することもあるが、その生産を蝕むこともある。経験的な議論をするにあたってわたしは、日稼ぎ被雇用者の経済的条件ばかりでなくその政治的条件を含みこむために、社会関係資本を制約する諸力を拡張している。そして、かれらが生活している経済的・政治的諸条件が社会関係資本に大いに影響し、有益な役割を制限していることを提示するつもりである。これら諸条件の拘束的な役割は、その条件下にある人びとに力を与える役割よりもはるかに強力なのである。

Orissa における貧しい賃金労働者の結合型社会関係資本

結合型社会関係資本の蓄積と利益

1 年のうちの数カ月のあいだ、主な収入源が臨時の日雇労働である家族は食料を不足させている。したがって互酬に基づく非公式の交換（あるいは利害にとらわれない非公式の食料の貸し借り）が広範に行なわれている。これは Putnam の一般化された互酬の重要な一側面である。日雇労働者（特記のないかぎり、回答者は日雇労働者）SND と NSM [インフォーマントの略称] にとって、互酬の規範／実践は生き残りにとって決定的に重要なものである。

SND: わたしの家族には今日、昼食になるものがありませんでした。そこで、ある隣人にお米を貸してもらいように頼むと、彼はお米をくれました。…この人もまたわたしたち同様、貧しい人なのです。

NSM: もし米がなければ、1 週間ぐらいお米を借りて、しのぐことができますでしょう。

食料の次に重要なのはおそらく、死の危険を伴うこともある緊急の医療行為——そこでは数多くの互酬が観察される——であろう。農村地域における病気・健康〔問題〕は町の病院までの搬送の必要性を意味する。その問題にはさらに医療費なども含まれている。

KRJ: わたしたちは互いに助け合います。もし誰かが緊急の医療行為を必要としていれば、わたしたちは人力車か手押し車で彼を病院に連れていきます[何人かの労働者がそれを持っていて、病人をそれに乗せて押していくということ]。

もし緊急の医療行為を要する状態が非常に深刻なものであれば、数人の隣人とどまらないより広範な社会・空間スケール（たとえばコミュニティレベル）での扶助が動員される。友人や隣人、親戚からの寄附で生活している貧しいライターである Musi が加えているように、

Musi: わたしは 10 月 12 日に重い病気に罹りました。[主に低位カーストの労働者からなる]村の人びとはわたしを[バスで 5~6 時間かかる]病院に連れて行ってくれました。かれらはそれぞれ 5 ルピー [インドの通貨] から 10 ルピーあるいは 50 ルピーずつ寄附してくれ、

14,000~15,000 ルピーが集まりました。わたしは普通の診療にかかるだけのお金を持っていませんでした。かれらは返す見込みのない私を助けてくれました。かれらは他の人にも手を差しのべます。…自分たちの食費を削ってまで扶助することさえあります。

これらと以下の引用が示しているように、対象地域のどちらにも強力な互酬の規範が存在している。おそらく金銭的、非金銭的な間柄の両面にわたって助け合っているのだろう。

階級／経済的および政治的諸条件は互酬の規範／実践にどのような影響をあたえるのか

これらの規範はどこからやって来るのだろうか？インタビューが示しているのは、すべての者が賃金労働に依存していること、貧しいことあるいは少なくとも裕福ではないこと、労働者の家族の間で互酬の規範が維持されていることといった事実である。このことは次の引用からも明らかである。

KLM：日雇労働者である人びとはわたしを信用してくれるし、わたしはかれらを信用しています。彼が困難な状況にあるときには、わずかばかりでも彼を助けるでしょう。…わたしたちの間には分け合っているものがあります。もしわたしが今日、彼から何かを借りれば、明日ないしは明後日には返すでしょう。また、彼が困難な状況にある時には…、五分の付き合いをしているわれわれ労働者は[小さな集落のなかで]互いに助け合っています。しかしより高い地位にある人びとはわたしたちとは付き合いがないし、わたしたちもかれらと付き合いしません。

AKP：わたしは自分の食料を他の労働者と分け合っています。以前に剥奪 (*abhaba*) をわたしが経験したからだと思います。わたしたちは貧乏です。わたしたちは懸命に働いています。わたしたちの母親は *matharanga saga* (ほうれん草のような野生の植物) でわたしたちを養ってくれたものです。誰かが病院にいったときにはわたしも医療費のためにお金を出しました。献血させました。もしわたしに血が必要になったら、そのときにはこの人がわたしに血を提供してくれるだろうと思います。

SNS (左派政党に属している労働者の指導者)：労働者はみな一つの階級であるがゆえに、その階級の内部には意見交換や相互扶助、共感などの関係が存在しています。

共通の階級の地位から生じる階級の連帯が互酬を下支えする重要な要因であることは、きわめて明白である。階級意識をもっている労働者もいる。つまりかれらは、自分たちが生産手段の所有者から排除された階級であり、したがってその生計が賃金労働に依存しているという事実を認識しているのである。互酬は部分的にこの意識とこれが生み出す共感に基づいている。

まず、労働者の階級の地位、すなわちかれらが生計を立てるために賃金労働に依存しているという事実がある。そしてかれらの階級の地位の結果がもう一つある。不確実さと貧困は労働者階級の主な結果である。1年のうちの多くの日々を仕事も食料もなく過ごすことになることは、みな知っている。しかし、仕事が得られるかどうか、したがって食料が手に入るかどうかは誰も知らない。この不確実さが互酬の規範と実践を維持しているように思われる。扶助の各々の活動は、助けてくれる人間は将来には助けを必要とするだろうし、助けをよこしてくれるだろうという「報酬」を暗示している。扶助は扶助の返礼の期待に基づいている。回答者の一人であり、政治的に意識の高い *Chasakhanda* にある小集落の労働者の指導者 STR が言うように、「人びとは『わたしが誰かを助ければ、将来助けを得ることができるだろう』と考えている」。労働者の中の互酬の規範と実践を下支えているのは、不確実さと貧困の結びつきなのである。

わたしは、階級こそが互酬のきわめて強力な基盤であろうと期待していたけれども、見知ったことはそうではなかった。階級と階級の結果とでは、後者のほうが互酬の規範を下支えする重要な要因である。これにはある理由が存在する。労働者とその階級の地位を意識するのは *Chasakhanda* よりも *Remuna* の方が強いけれども、意識の度合いには限界がある。労働者は階級の地位それ自体よりも階級の地位の結果、すなわち貧困や不確実さの方をより意識するのである。互酬の維持における階級や階級の結果の役割を階級の空間性から抽象して理解することはできない。たいていの場合、互酬の規範が存在するのは、一つの村に共に暮しているという労働者たちの感情のためでもある。そして(階級の空間性を示す)近

隣性 neighbourliness と階級に基づいた互酬の規範は共存する。階級とロケーションは共に相互作用の規範に影響を与えている。Chasakhanda の KRJ は「わたしたちの隣人はわたしたちと同じです。かれらは賃金労働に依存している。わたしたちは必要に応じて互いに助け合うのです」と言っている。政治に積極的な Remuna でのフォーカスグループ・ディスカッションの回答者の一人は KRJ の見方を共有していた。

わたしたちは隣人です。わたしの家は彼の隣にあります。今日はわたしが[食べるための]物を持っていると仮定しましょう。あなたは持っていない。今日はわたしがあなたにあげます。明日はあなたがわたしにくれるでしょう。こうした感情はなぜ存在するのでしょうか？ わたしたちはみなある一つのカテゴリーに属しているからです。今日はわたしが物不足になってしまった、明日は誰もが事足りているなんて保証はありません。おそらくは彼が物不足になっていることでしょう。だから良い関係が存在するのです。今日わたしが彼を頼りにすれば、彼はわたしからの助けを必要とすることでしょう。こうしたことがあるゆえに、良い関係が存在するのです。

Remuna の CPM メンバーとのフォーカスグループに参加した一人がこの見方を補強している。

同じ経済的カテゴリーに属している人びとは、同じ近隣〔地区〕のなかで生活をしています。かれらはお互いに困難な状況にあることを充分に知っています。今日貸した人は、明日借りる人にかわるでしょう。お互いの脆弱さについての認識は協働や信頼の発展を促進します。

質的インタビューから明らかになるのは、Chasakhanda よりも Remuna において階級意識が——あるいは近隣性と結びついて——はるかに広い範囲で互酬を下支えしている、ということである。たしかに、Chasakhanda よりも Remuna の回答者の方がはるかに、階級的連帯が——あるいは近隣性と結びついて——互酬に影響していることを示していた。しかし階級や階級に関連する労働者の生活の諸側面が互酬を促進しうる一方で、そうした諸側面が互酬を蝕むこともありうる。貧困から救済するための互酬の実践やその効果を実質的に阻害する労働者家族の階級的特性は、少なくとも三つの側面をもっている。第一に、貧しい労働者が同じ階級の隣人

を援助する能力はきわめて限定されている。Remuna のフォーカスグループの一員が次のように言っていた。

貧しい労働者階級の間には紐帯が存在します。わたしが今日、病気にかかれば、わたしたちの日稼ぎの仲間はきっとわたしを助けてくれるでしょう。しかしかれらは手段を、富をもっていません。できることならなんでもやってくれるでしょうが。

このことは Chasakhanda の KLM によっても支持されている。

わたしたちはしばしば借りなければなりません。一日に食事を三度とるかわりに、食事を二回にして借りた金を返せるようにわずかな分を蓄えておきます。…わたしには物が不足しています。わたしはどのようにしたらあなたを助けることができるでしょうか。…ご承知のとおりわたしも彼も一日に 30 ルピー稼いでいます。彼の稼ぎは家族を養うのに十分なものではありません。わたしもそうです。お互いを助け合うような余力は、わたしたちにはないのです。

貧しい人びとは互いに助け合う能力を限定されているばかりではない。貧しい人びと、とくに極貧の人びとは、わずかに暮らしぶりがよいと思われる隣人から（あるいは、さらに言えば他の人から）十分な援助を得ることができないという事実も存在する。

JHD（女性政治家）：あなたがわたしと良い関係を築いていれば、わたしはあなたを助け、あなたはわたしを助けるでしょう…それがすべてです。…誰が極貧の人びとを世話するでしょうか？ 誰もいません。かれらには返礼ができないからです。誰もかれらを信用していません。貧しい人びとのなかでも信用するに値する人…もしかれらがわたしのために働き、わたしがかれらに与えたことに報いることができるなら、わたしはかれらを助けることでしよう。

NSM：もしわたしに返礼する能力があると考えているなら、わたしの隣人は何かを貸してくれるでしょう。もしあまりにも貧しく、全く何も持っていないとしたら、誰もその人に物を貸さないでしょう。与えるということもしないでしょう。

さらに Chasakhanda のフォーカスグループの一人がこう付け加えた。

わたしたちがお金をいくらか貸してくれるように頼んでも、人はわたしたちを信用しない。わたしたちは日雇労働者でその日暮らしをしている、一体どうやってお金を返すのだろう、とかれらは考えているのです。

こうして貧しい労働者世帯は（強力な互酬の規範があるにもかかわらず）他人を十分に援助することができないのである。かれらは十分な援助を得ることもできない。それは、もつとも援助を必要としている人が互酬のネットワークから排除された人であることを意味している。全員が互酬のネットワークの一部であるわけではないという事実とは別に、お互いに助け合おうとするときでも、他人から受ける援助と他人に与える援助の総計が合致しないという実情もある——そしてこれこそ、階級がどのように互酬の実践を制約するかの第三の側面なのである。

SKB（学校事務員）：（米などの）貸し借りはよくあります。けど、あまりにも多くのものを要求されると、援助することができません。…このことが解決されることは永遠にありません。一時的な援助なのです。何度援助すれば足りるのでしょうか。

賃金労働者が貧しい場合、いかにして互酬の規範が充分に実践されるのだろうか？ NSM が言ったように「村の全員が同時に食料を使い果たすことはないだろう」。それは、〔任意にとりあげた〕どのような日であっても強力な互酬の規範が存在すれば、コミュニティレベルにおいては分け合うことのできる食料の余剰があるだろうということを意味する。2, 3 日分の最低消費水準にくわえて余剰をいくぶんか蓄えている家族もある。相互扶助の形態における米などの循環は、本来は労働者の消費の貯えの一部であるはずの、この一時的な「余剰」から生じている。これ〔米〕は、必要なときには戻ってくるだろうという強い期待とともに、食料をもたない家族に分け与えられる。しかしこのことは、長期にわたって余剰が欠乏しているがゆえに、互酬の規範のための物的資源がきわめて脆弱であることをも示している。借りたのに約束どおり返せない場合には、関係が辛辣になる理由となる。信頼がしばしば意図と反して反故にされるものに基づいているがゆえに、互酬の実践の継続性は〔つねに〕脅威にさらされている。

CHM：もしわたしがあなたから何かを借りて返すことができないならば、わたしは先延ばしにして、関係が苦々しくなっていくでしょう。信頼の関係は不足（*abhadba, anataka*）のために弱くなるのです。

JVP：借りたのに返さない者もいます。このようなことが起こったときには、隣人は互いに助け合うことを厭います。

BBS：もし誰かが他の誰かから物を借りたとしたら、借りた人はしばらくの間その人と会いたくはないでしょう、借りた物を返さなくてはならなくなるといけませんから。彼はその人を避けようとし、別の人と関係を築こうとします…。

これらの見解が Chasakhanda のフォーカスグループの一員によっても繰り返された。

わたしが持っている 2 キロの米のうち、1 キロは〔今日〕必要で、もう 1 キロは明日のためにとっておいたほうがよいと仮定しましょう。もし誰かがわたしに米 1 キロを貸してほしいと頼んできたら〔そして〕…もし彼が、おそらく米を返してくれるだろうとわたしを納得させることができるなら、わたしは彼にそれを譲ります…。もしその人物が約束を破れば、きつと喧嘩になるでしょう。

かれらは喧嘩をする。よくあることである。こうして、信頼や互酬という社会関係資本の基本的な要素が、絶対的貧困からの限定的かつ一時的な救済を引き起こしうるのである。しかし信頼や互酬の実践は制約されており、そしてその実践を下支えしている規範は貧困によって弱められている。

近隣性という点から理解された階級の空間性は互酬を制約する効果をもつこともある。社会関係資本は社会的相互作用を前提にしている。そして「社会的相互作用はたいいてい局所化された時空間の文脈において生じる」。Cox and Mair が人びとの「地域依存 local dependence」と呼ぶところのものを引き起こすのである(1988, 312; インド農村部における階級の地域依存については Das 2001 をみよ)。社会関係資本に関しては、たとえば Cox and Mair が言うように「[社会関係資本の重要な一側面である]相互扶助は特定の隣人に対してのものである」。一般的には、特定の場所にいることによって——あるいは場

所に基づいた社会支援ネットワークの一部であることによって——人は助けを得ることができるし、また他人を助けることができる、というのが実情である。回答者の一人である Purna (低位カーストの労働者たちの集落に住む行政職員) が次のように言った、「食うのに困ったとしたら、わたしは隣人から米を分けてもらおうとするでしょうが、村の外から分けてもらおうとはしないでしょ」(傍点は筆者)。相互扶助の地理的な結びつきの理由の一つは、相互扶助が信頼を前提にし、場所に基づく相互作用のルーティーン化——Giddens(1987)が言う「共に *co-presence*」によって特徴づけられるもの——を通じて信頼関係が発展するのには時間がかかることにある。互酬の規範や実践には空間的に結び付けられる傾向がたしかにある。つまり、これらは限定された地理的空間において生じる傾向がある。このことが知らぬ間に人びとを脆弱にしてしまうこともありうる。人びとは、自らがその一部である場所にに基づくネットワークの資源にアクセスする。しかし、この資源は階級やその結果である貧困のゆえに限定されているばかりではない。これらのネットワークが限定されているのは、地理的に限定された地域にしか広がっていないからでもある。

わたしは労働者の家族を、労働者階級を構成するものとして、生計をたてるために賃金労働に依存している家族として扱っている。しかしながらこの階級はとても均質なものとはいえない⁹⁾。この階級の内部には経済・文化的差異が存在する。そしてこの差異は互酬の実践に対するある態度を含んでいる。これらの家族のなかには給与をもらう行政の仕事に就く人間(つまり職員)を抱える家族(つまり夫婦は日雇労働者として働いているが、息子は役所に勤めているといった家族)もある。これらの労働者階級の家族は日雇労働に完全に依存している家族よりもいくぶんかましである。労働者階級世帯のこれら二つのカテゴリーは、しばしば同じカーストのカテゴリーだがうまくいくことはなく、そしてしばしば互酬関係では結びついていない。

KLM:わたしたち *harijana*[最下層のカースト]のコミュニティには行政職に就いている者が数人いますが、かれらはわたしたちを嫌います。わたしたちの家にやっ来てさえもしません。

NSM:わたしたち *harijan* カーストの中でも裕福になつた者は…自分と同じカーストの貧しい者を憎みます。昔は伝統的に、土地の所有者でさえ貧しい者に幾分かの同情をもっていました。しかしこれらの人びと [*harijans* のなかの富裕層]はわたしたちを憎むのです。

労働者階級の内部には重要な職業文化的な差異が存在する。農業従事者もいれば工場労働者もいる。この種の差異は Chasakhanda ではそれほどでもないが、Remuna ではきわめて重要である。というのは、Remuna は工場街に近く、Remuna 自体にも産業があるからである。Remuna の年輩の行政職員 RJS が次のように言った。

[工場労働者と農業従事者がいる。]もし工場労働者が[誰かに]工場での仕事をもってきたら、二つのタイプの労働者間で競争が起こるでしょう。[何人かの]工場労働者は1日に60~70ルピーを稼ぎますが、農業従事者は50ルピーです。工場労働者はズボンとシャツを着ますが、農業従事者は *gamuchha* (厚くて長い木綿の生地)を着ます。[何人かの]工場労働者はサラリーをもらいます[しかし農業従事者は日雇労働者である]。農業従事者は工場で働きたいのですが、工場労働者はそれを支援しません。工場労働者が工場での仕事を探している農業従事者を支援することはめったにありません。

部分的には職業的な差異があるために、労働者階級の間で収入にいくぶんかの違いがある。みな貧しく、生き残りのために奮闘しているときは、かれらの間の些細な経済的な差異——わずかししか持たない、あるいは全く何も持たない者がある一方で、毎日の食料の蓄えがあるという程度のぜいたくがある人びとがいることさえ——が、互酬の規範を蝕む邪な感情や嫉妬の感情を引き起こす。

KLM:もしわたしがある場所で50ルピーを稼いでいるとしたら、そしてもしわたしがそこでの仕事に隣人を誘わなければ、彼はわたしを怒るでしょう…。わたしたちはみな貧しいので、わたしたちの間には嫉妬の感情があるのです。

労働者階級の内部には政治的な差異、すなわち政治政党のラインに沿った差異もある。これにはいくつかの含意がある。互酬あるいは相互扶助はしばしば特定の政党を支持する集団内で実践される。

FOCO：もし選挙期間中にわたしがあなたと闘えば、わたしが仕事を得ても、あなたを誘うことはないでしょう。「支持政党から援助してもらえばいい」と思うでしょうね。

SDM：ある議員[国民会議派の議員]が[台風があった後]幾分かの救援をしてくれました。彼はその救援すべてを会議派支持者に分け与えました。他の者はもらえませんでした。

この見解は貧しい日雇労働者ではない人びとによっても支持されている。BNB（行政事務員）と DLD（行政事務員にして土地所有者）のコメントが以下に示しているように、

BNB：Janata 党員が国民会議派を支持する貧困者を助けることはないでしょう。

DLD：人は「彼はあの政党を支持している。どうしてわたしが助けなければならないのか」と考えます。

このように、互酬の実践はしばしば共通の政治的忠誠心によって規定された集団によって制約される。特定集団の部外者であれば、たとえ支援可能な人がいたとしても、その人は自分のニーズを支援してもらえないだろう。

インド東部の貧しい賃金労働者のための橋渡し型社会関係資本

橋渡し型社会関係資本の蓄積と利益

アソシエーション/クラブ——労働者の協同生活——は橋渡し型社会関係資本の一形態をあらわしている。それは互酬の規範（あるいは結合型社会関係資本）よりも大きな社会的スケールでの社会関係資本であり、しばしば空間的スケールにおいてもそうである。どちらの村にも文化的アソシエーション、自助集団、若者クラブ、地方開発アソシエーション、宗教的アソシエーションのような市民組織がたくさんある。これらのアソシエーション——その多くは労働者階級の小集落にあり、労働者階級のメンバーによって仕切られている——は一見、貧困者の間の

信頼や協働の関係を促進しているようにみえる。

KRJ：一方の *dhoba* および *kandara* カーストと *pana* カースト[これらはみな「不可触民とは異なる」カーストである]の間には数多くの争いがありました。わたしたち[つまり低層カーストの労働者]は *Pallee Mangala yuvaka sangha*（地方の若者による福祉アソシエーション）を設立しました。かつては異なる近隣地区出身の犬が争い合っただけでも、近隣地区は分裂したものでした。[しかし今では]クラブがあるために、ちがう小集落出身であっても若者は同席します。わたしがクラブに行ってもそこに座っているのに、父がそこで他の人と喧嘩するのでしょうか。…昔は、わたしたちは一緒に座っていなかったし、物事を一緒にすることもありませんでした。今では一つの場所に同席しています。互いに助け合うという姿勢が芽生えてきました。昔は高層カーストの人は *harijans* と付き合いませんでした。今では付き合います。今ではみなが食事を共にし、同席します。一緒に噂話をします。

クラブやアソシエーションはこうして、信頼と協働関係というかたちで社会関係資本を促進する。そして今度は、後者[社会関係資本]が確実な利益を産出できるようになる。

SDJ：わたしたちの若者クラブは村の池や管井戸を掘ることを手伝っています。それは困難な状況にある人や学生を支援します。

KLH：人力車夫のアソシエーションは、お金がなくて困っている車夫にお金を与えてくれます…。今日、わたしの人力車のタイヤがパンクしたとしましょう。家で何もしていない代わりに、タイヤを調達して、人力車を引き、お金を稼ぐことができるのです。

MUSI（彼が指導している文化的組織について）：わたしたちは村の道を清掃します。池を清掃します。緊急の医療行為を手助けします。娘の結婚も支援します。池を掘ることだってします。

また、アソシエーションの利益は物的なものばかりではない。多くの人が社交や精神的な目的のために非公式の宗教的アソシエーションに参加している。なぜ宗教組織の一員であるのかを尋ねると、高齢の賃金労働者 BBJ は「われわれの神を崇拝するためです。楽しみのためです。わたしたちはみな貧しい者です。この組織は共に楽しむ機会をわたしたちに与

えてくれます」とこたえた。

先ほども言及したように、Remuna は Chasakhanda の場合よりもはるかに多くの橋渡し型社会関係資本の蓄積がある地域の一部である。たしかに Remuna は、土地所有者に抵抗する農民運動の長い伝統がある Orissa 東部の一部である。Remuna 自身が CPM——政治的な組織化だけでなく被災時の支援の提供(たとえば Orissa を直撃した大型台風の後に衣類を提供する)にも関わっている左派政党——の強い組織を有している。Remuna は Chasakhanda とちがって工業センターにも近く、それ自体も小さな工場を持っている。したがって村での関係は仕事上の関係を通じて強められている。かれらにとっては、そのほうが容易にアソシエーションを形成できるのである。しかしながら、Remuna では Chasakhanda よりも強い市民社会の伝統がしっかりしているにもかかわらず、労働者が住むこれらの場所に存在する経済的・政治的諸条件が、橋渡し型社会関係資本の創出に不都合な影響を与えている。わたしが今立ち返ろうとするのは、これらの諸条件である。

階級／経済的および政治的諸条件は労働者の協同生活にどのような影響をあたえるのか

アソシエーションを継続させるには資金が必要である。そして資金こそは、労働者が十分な蓄えをもたないものである。かれらはこのアソシエーションにいくら献金したかをめぐって争いはじめる。

CHM：数代にわたって存続している *bhagabata ghara* (宗教的アソシエーション) があります。人びとは特別な機会の祝祭に献金します。50 ルピーを納める家族もあれば 10 ルピーを納める家族もあります…。誰がいくら納めるかをめぐって争いが起こります。

これは典型的である。そのうえ、資金のことは別に人びとは仕事に従事しなくてはならない。しかし日雇労働者は自分たちの仕事にも忙しい。働かなければ、食えない。かれらは朝に家を出て約 8 時間〔働き〕、夕方にはとても疲れて帰ってくる。時間がないという問題は、ますますかれらが仕事に就くの何マイルも通勤しなくてはならないという事実によって悪化させられる。

GLB：人びとは自分たちの生き残りに関心を向けすぎています (*khatile khaibe*)。わたしの家族は 5 人です。わたしはまず家族を世話するでしょうか、それともクラブやアソシエーションに行くでしょうか。

TRJ：…あなたがわたしにクラブで数時間過ごすように求めるとしましょう。わたしはまず賃金労働のことを考えます。家族を支えるための 6 ヶ月分のお金を持っていれば、またそのクラブや組織でわたしが必要とされているならば、わたしはその組織のために時間を費やすことができるでしょう。

非労働者も同じ意見をもっている。たくさんの労働者のことを知っている地方の政治家の一人 JHD が次のようなことを言った。

もしみんなが食べるのに困らなければ、嫉妬なんかないでしょう。もし食べるのに困らないのであれば、「あれやこれや一緒にしよう」と言うでしょう。お金がないがために、協力していっしょに何かすることに熱心でないのです。みんな彼〔あるいは彼女自身〕の利害を工面しているのです。

事実、アソシエーションが橋渡し型社会関係資本として機能して、さまざまなロケーション／集落に住むさまざまなカーストの賃金労働者の家族を結びつけている。たとえば主に農場での賃金労働に依存している家族と、下級の行政職などに依存している家族を結びつけている。しかしそのアソシエーションは、これらの家族とより富裕な家族の間にある「ギャップ」を橋渡ししていない。アソシエーションは富裕な者と貧しい者の関係を促進するかと尋ねられると、ちょっとしたビジネスもしている賃金労働者 CJ は言った、「富裕な人はわたしたちと付き合うことさえあまりしたがりがませぬ。付き合いが多くなれば、援助を頼んでくると思っているのです」。賃金労働者の貧困はそのアソシエーションを富裕層から遠ざけておくのである。

これらの問題に政治的要因が付け加わる。あたかも、これらのアソシエーションを促進させる可能性をもつ諸条件を蝕むには(階級に起因する)貧困だけでは不十分であるかのように。先述したように、他と同様、労働者は政治政党のラインに沿って深く分断されている。これは創出される社会関係資本の

量を限定する。低層カースト労働者の小集落に住む行政職員 Purna は彼の文化的アソシエーションでの経験について語ってくれた。

Purna : 秘書をしていた頃、わたしはある政党を支持していました。わたしが対立していた政党はなくなりました。その政党の人びとは、わたしが支配政党の支持者であるがゆえに、[秘書を] 担当していることをよく思っていないませんでした。政党への感情はアソシエーションに関わります。[しかし] その機能が影響することはありません。文化活動はあり続けます。政党の支持に関係なくみんながその活動に寄与します。しかし、交流はこの活動だけに限られています。活動が終わると何もありません。

一緒に席に着くことさえできないことも時折ある。ある行政職員が述べていたように、

DLD: わたしたちには会合などのためのコミュニティハウスがあります。しかしある日ある政党から人がやってくると、その日は別の政党の間はそこに行かずに、次の日にやって来ます…。一緒になったり、[賃金のために] いっしょに仕事をしたり、ショッピングエリアなどに行ったりすることもあるかもしれませんが、アソシエーションを設立しようとするときには、違いがあらわれます。

DLD のこの発言は彼の村全体に関するものである。しかしそれは村の労働者にはあまり関係がない。

村の政治家はしばしばこのアソシエーションを積極的に弱めている。RRD が言うように、かれらは村のアソシエーションを「狙っている」のである。多くの回答者がこの見解を共有している。

GLB: 文化的アソシエーションは信頼関係を促進するでしょう。しかし政治家たちは信頼を壊しています。貧しい人びとは[文化的アソシエーションを通じて] 結束することができますが、政治家はかれらを分裂させています。…抗争をつくりださなければ、かれらが利益を得ることはないでしょう。わたしたちを分裂させなければ、村に入ってくることはできません。

土地所有階級のある回答者も同じ見解をもっていた。

JGM : 何人かの者が若者クラブを設立しました。か

れらは選挙に参加しました。その後クラブは解散しました。今やかれらの間には政党への愛着が存在しています。

自発的アソシエーション *voluntary association*

を立ち上げようとする貧しい労働者がジレンマのなかにいることは明白である。かれらが特定の政党と緊密な協力関係をとると、かれらは政治家から（行政の）資金をもらえるかもしれない、したがって先述した資金問題に着手するかもしれない。しかし今度は、政治家がそのアソシエーションの成員に選挙支援を求める。そしてアソシエーションがある政党の政治家の支援を広げるときには、他の政党の政治家が何人かの成員に圧力をかけて、その支援を買収しようとする。こうして組織内の抗争がつけられるのである。あるアソシエーションが特定の政党あるいは派閥に忠誠をつくすと、社会関係資本の質は歪曲されることがある。つまりアソシエーションが労働者コミュニティのある部門の利益のため（たとえば特定の政治政党あるいは政治指導者を支援する労働者のため）だけに事をなすようになる。他方において、アソシエーションが政治政党の影響から距離を保とうとすると、そしてこの意味において非政治的なままであろうとすると、政治家からの資金援助は極端に不足する。Musu が言うように、「他のアソシエーションやグループは[政党から/政党を通じて] 資金を得ていますが、文化的アソシエーションはそうしません。わたしたちは政党横断的に活動しているからです。どの政党の若者もみなわたしたちと共にあります」。

このインタビューから明らかになったのは、どのようなアソシエーションも潜在的には票田であるということである。ある政党が、特定のアソシエーションを反対陣営にとっての潜在的な票田だと考えたとき、その政党は先制的な措置としてできるだけ早いうちにそのアソシエーション（あるいは少なくとも何人かの影響力のある成員）を取り込もうとする。そして多くの場合、貧しい人びとは、贈収賄、行政がスポンサーになっている計画での賃金労働の約束、あるいは村や家族の争いの支援などを通じて仲間に引き入れようとする政治家の試みに対して脆弱である。さらに問題がある。政治家は労働者家族に充当される行政資金を着服しているとみなされているので、地方レベルの文化的・社会的アソシエーション

には、政治家の向こうをはる対抗的な監視の役割を果たす可能性が潜んでいる。これらのアソシエーションはあらゆる立場の政治家にとって潜在的な脅威である。後援するということを通じてアソシエーションあるいは少なくとも数人の成員をコントロールすることは、組織を解体するのに有効な手段である。Remuna の NGO の事務職員 SKS が言うように、「組織が解体されればされるほど、政治家には都合がよいのです。政治家はかれらの組織化を妨げるでしょう」。

たしかに政治政党のちがいがから抗争が生じ、相互の信頼は侵害される。こうしたことが共に何かをすることから人びとを遠ざける。政治家は一度形成されたアソシエーションを解体しようとするだけではない。たしかに信頼を壊し抗争を生み出すことによって、かれらは、アソシエーションの形成や集会的活動への関与に導かれるはずの諸条件を蝕んでいるのである。政治家が抗争の主な原因であるというのは、階級と職業が異なる回答者の間でもほぼ意見が一致している。

JVP (退職した地方開発局の職員) : ある政治政党はある集団を支援し、別の政党は別の集団を支援します。その結果、家族の兄弟の間や隣人の中で意見の相違 (*manomalinaya*) が生まれます。

GAR (農業従事者) : 選挙システムや政党への愛着は村内抗争の火種です。人びとは個々別々にちがう政党に属しています。このことが抗争を生むのです。

BNS (製造工場オーナー) : 政治政党のシステムが家族を分断することさえあります。ある家族の成員は、政党の指導者から何か——ローンや仕事——をもらえることを期待して、ちがう政党につくのです。

SNS (左派政治家) : クラブやアソシエーションは人びとの間の社会関係を促進するはずですが、しかしわれわれ政治家はそのようなことが生じるのを許しません。それらを分断することによってわれわれは票を得るのです…。もしわれわれがそれらを掌握すれば、それら [クラブやアソシエーション] は一つにまとまって、今日はわれわれを支持することもありえます。しかし、それらの集団すべてが他を支持するということもありえます。それらの分断はわたしにとっては数人からの支持を保証します…。近頃は、小さな村のなかに 3~4 のクラブをみることでしよう。人びとが分断されているからです

…。人びとは集まって道路の清掃などのようなことをします。しかしそれは稀です。

Purna (行政職員) : 一般的にいて労働者は貧しい人びとです…。政党の指導者はかれらに金を与え、行政から何らかの利益が得られるよう便宜を計らいます。それがかれら [労働者] を分断させる方法なのです。

政治家と貧困者の関係は垂直的な関係である。垂直的な関係のネットワークは (多くの) 社会関係資本を創出しないし、貧困者にとって利益にならない (かれらは政治家のネットワークに利益を与えるにもかかわらず)。政治家は自分たち同士で (そして行政職員と) がっちり結び合っている。かれらのネットワークは貧しい賃金労働者のそれよりもはるかに強力である。Putnam の社会関係資本を批判する DeFilippis が指摘するように、「特定の社会的ネットワークは他のものよりも強い権力的地位にあり、だからこそその成員にはるかに大きな実質的な見返りをもたらすのである」(2001, 791)。

経験から理論へ：結論のコメント

労働者階級の家族が他の家族を援助する方法はきわめて豊富である。互酬は食料や金銭、それ以外のものにわたっている。これらの家族は、相互利益のための集会的活動に携わることによって自発的アソシエーションにも関与している。社会関係資本が「社会的ネットワークあるいは他の社会構造の成員であることの結果としての利益を保障する個人の能力」(Portes and Landolt 2000, 532)のことであるならば、インド東部の地方の賃金労働者家族の間にある互酬のネットワークや自発的アソシエーションは社会関係資本の形態をとっていることになる。

Callinicos や Portes にしたがいがながら、わたしは多くの互酬の実践——結合型社会関係資本、あるいはそれを言うなら橋渡し型社会関係資本さえも——が、労働者階級の「結束の固い連帯」、換言すれば階級意識に基づいた結束の固い連帯から説明されるだろうと期待していた。労働者の連帯は、同じような逆境に直面している労働者階級の間にも生まれたわれわれ意識の感情に基づいている (Portes and Sensenbrenner 1993, 1327-8; Callinicos 1988,

199-203)。わたしの経験的資料が示すところによると、階級的地位はたしかに互酬を基礎づける重要な一要因である。自分たちは財産をあまり所有していない階級であり、したがってその生計は賃金労働に依存しているという事実を意識している労働者もいる。対象地域において互酬という観点から得られることの一部はこの意識に基づいている。そしてこのことはとりわけ、左派組織が脆弱な Chasakhanda よりもむしろ Remuna において真である。

つまり、労働者階級という地位の結果が存在するのである。その一つが不確実さであり、もう一つが貧困である。明日もきっと賃金労働に就いて、食べるものを得られるだろうと確信している者はだれもない。両地域の労働者間の互酬の規範／実践の防衛的な機制の根底にあるのは、不確実さと貧困の結びつきである。たしかに Harvey が言うように、「労働者階級の近隣でみられる互酬は、かなりの程度、身を守るための工夫である」(1985, 120)。労働者の社会的・文化的アソシエーションにも同様の論理がある。ウェールズの労働の地理に関する Cooke の研究が示しているように、労働者のアソシエーションは「日々の生活条件を改善するための一手段として、かれらのコミュニティの要求や苦情に対する普通の労働者の集会的な対応から」生じているのである⁹⁾。

批判的人文地理学や社会科学における階級の一般理論的意義を考慮し(Smith 2000; Wood 1998; Gibson and Graham 1992; Thrift and Williams 1987)¹⁰⁾、かつ階級と社会関係資本の間に仮定した特定の結びつきに注目して、わたしは階級が互酬のきわめて強力な基盤であろうと期待した。しかしこれは経験的には証明されない。労働者の自らの階級的地位に関する意識は空間的に一様ではないにせよ、その意識の度合いは限定されている。労働者はその実際の階級的地位よりもむしろその結果、とくに貧困と不確実さに意識的である¹¹⁾。こうした理由のために、経験的には、階級そのものよりもむしろ階級の結果としての貧困と不確実さのほうが互酬の規範／実践のためのより強力な基盤なのである。このことは「人びとは…かれらが直接的に経験し理解する当面の環境においてそしてそれを通じて階級の力を悟るようになる」(Walker 1985, 187)という事実を指し示している。貧困や不確実さがこれらの条件

のひとつであることはほぼ間違いない。

階級と階級の結果ばかりが社会関係資本を条件付ける要因なのではない。たいていは、互酬の規範と協同生活は、労働者たちがある村に共に暮しているがゆえに存在するのである。近隣性に基づいた互酬の規範と階級に基づいたそれは特定の場所に共存している。[そして]階級とロケーションは共に社会関係資本に影響を与えているのである。

近隣性とは階級的地位の代替物だと論じられることもできよう。両地域においては、インドの他の地域と同様、労働者階級の人びとそしてとくに低層カーストの労働者は、高層カーストで財産を所有している家族から離れた小集落に住んでいる。しかし、階級および階級に関連する意識の点から「近隣性」に基づく互酬の規範を説明するだけでは、還元主義になってしまうであろう。現実においてもまたその心情においても、労働者は労働者以上[の存在]である。かれらは、ある空間的關係、空間的並置、あるいは Massey の言葉を用いると「お互いとの関係の偶然的な編成」(1999, 283)の内にある特定の場所で生活している人間存在でもあるのだ。かれらが隣り合っただけで生活しているという事実、かれらは隣人であり、自分たちをそのように認識しているという事実は、部分的にかれらの間の互酬の規範を基礎づけている。近隣性は階級の単なる代替でもなければ、階級とは何ら関係ない独立したプロセスでもないのである。

近隣性あるいはロケーションが互酬を基礎づけているという事実は、階級や社会的関係の構造の空間性についての地理学や社会学における広範な調査に関わっている。空間構造は社会的過程を促進したり制約したりする。場所に基づくネットワークを空間構造として考えてみよう。Gilbert(1998)が言うように、これは促進もするし制約もする。一方において、たとえば労働者間の近隣関係の点から表現される「空間の連続性」は、労働者階級の経験(の理解)にとって「きわめて重要な基盤である」(Walker 1985, 187)。さらに詳しく言うと、労働者階級の近隣における相互扶助という場所に基づくネットワークは、労働者階級の貧しい人びとの日々の生活の変化する度合いにとって重要なものになりうる。しかし他方において、「日常的な相互作用…はかなりローカル化する傾向があり」(Gilbert 1998, 600) ,

先ほど言及した Cox and Mair(1988)が言うところの、人びとの「地域依存」へと至ってしまうがゆえに、場所にに基づくネットワークは制約的になることもある。互酬の規範と実践は空間的に制約されている。このことが意味するのは、人は自らをその一部とする場所にに基づくネットワークという資源へのアクセスを持っているということ、しかしこの資源は、階級という理由ばかりでなくネットワークの範囲が地理的に限定された地域にしか広がっていないという理由のために限定的であるということである。階級ばかりが互酬の実践の制約要因なのではない——交換すべき資源を持たないがゆえに、空間（あるいはより正確には階級の空間的形態／関係）もまた制約要因なのである。

社会関係資本に影響を与えるのが階級であろうと階級の結果であろうと、あるいは階級の空間性（換言すれば労働者階級の人びとは、その生活を空間的に限定された地域に根付かせている隣人同士でもあるという事実）であろうと、他の資本形態、なかでも経済的資本を切望している賃金労働者の家族にとって、社会関係資本の便益は両村落においてはきわめて限定的である。わたしがここで注目しているこうしたこと理由は、広く言われているように、階級である。わたしは、階級は社会関係資本を促進するよりも制約すると言ってきた。さらに説明が必要であろう。

結合型社会関係資本については次の二点が指摘できる。第一に、労働者階級は社会的物的資源から排除され、相対的に剥奪されている。かれらの階級的地位を考慮すると、労働者は自分たちの間で共有する物的資源〔の量〕を限定されている。そして資源がなくては、ある場所において、そして場所を越えて共有するということのインフォーマルな規則を長年にわたって（活発な形態で）維持することは難しい。貧しい人びとが若干の財産を所有している場合、議論の余地があるにしても、ツールや市場についての情報のようなものを共有することができ、したがって社会関係資本が貧困の軽減に一定の役割を果たすことができる。しかし貧しい人びとが財産のない賃金労働者——主な収入源が賃金労働であり、共有できるものをほとんど持たない人びと——である場合、社会関係資本の役割にはきわめて問題がある。たし

かにかれらの主要な資産はその労働力である。それはかれらが潜在的に共有しうる主要なものである。しかしかれらが持っていない土地のような物的財産に適用されてこそ労働力たりうるのだから、労働力の共有（の規範）は結局たいしたものにならない。たとえば、それに関するわたしの議論が明らかにしたことは、ある集合的な基準に基づく村の池での漁業への関与にかれらが非常に敏感だということである。しかし一般に、池はかれらの所有物ではない。自分たちの労働力を自らすすんで集合的に使用するようにながす互酬の規範があるにもかかわらず、これらの規範はあまり有効ではない。かれらは財産を所有していないからである¹²。互酬の規範——あるいは「貧困者は互いに支えあっている」(Woolcock and Narayan 2000)という考え——はこの種の文脈ではほとんど役に立たないであろう。地理学者の中でも社会関係資本の最も熱狂的な支持者である Bebbington は「社会関係は他の資源へのアクセスを促進することのできる資源のひとつである」(2002, 801)という。しかし社会関係は必然的に／自動的に資源であるのではない。おそらく資源となるには、特定の種類の社会関係にならなければならない。

（二人の貧しい被雇用者の社会関係がどのような類の資源になりうるのか、そしてそれはかれらの貧困の軽減にどのように役立つのであろうか。）社会関係資本にきわめて批判的な地理学者である DeFilippis が正しく言っているように、社会関係資本を規定する紐帯、あるいは「結びつき…はそれ自体で、ある場所にいる人びとを裕福したり貧しくしたりするのではない」(2001, 790)。共有の規範は共有すべきものを持つ人びとがいなくてはまったく機能しないのである。

第二に、相互扶助はある程度の確実さの期待に基づいていることがきわめて重要である。つまり、困難な状況にあるときには他者との関係が扶助の一資源として機能するだろうという期待である。しかし労働者階級の生活の根本的な様相は不確実さであり、単なる物的資源からの排除ではない。生産手段から切り離されているがゆえに、生存手段へのアクセスは一般的には賃金労働の確実さに依存しているのだが、しかしそれは保証されていない。週末をどのようにやり過ごすのか誰にも検討がつかない。労働者

階級の不確実さには、互酬の規範の再生産のための諸条件——強力な対抗力（たとえば地域外からの支援）がない限りは確実さの感覚を前提とする——を蝕む傾向がある。ある人がいつか返す約束をして隣人から物を借り、そして賃金労働を得られなくて約束を果たせなくなると、その人は隣人の信頼を失うことになる。わずかながら分配できる食料や金を持っている人が「貸すことを」しぶる例はたくさんある。それは信頼や共感が欠落しているからではなく、明日も食べていけるかどうかわからないからである。この結論は、一般化された互酬の規範が効果を発揮するには、人びとが「信頼は報われることはあっても搾取されることはないだろう」（1993, 172）ことを信じる必要がある、という Putnam の考えに受け入れられるものではない。Putnam に言わせれば、信頼関係が失われるとすれば、それは個人が利己的だからである。これは結局、心理学の観点から社会的規範を説明することとなり、人びとがその下で生活している物的制約を無視することになる。労働者階級の人びとは相互扶助を実践している。しかし自ら選択しうる条件下でそうしているわけではない。

いまや階級や政治が橋渡し型社会関係資本を制約する諸効果を考察するときである。第一に、社会・文化的アソシエーションを設立し存続させるには、人びとが労働から自由になって貢献することが必要である。しかし日雇労働者は自分たちの仕事に忙しい。かれらは働かなければ、食べられない。かれらにはアソシエーションのための時間がない。かれらは Putnam のボーリングクラブのメンバーではないのである！ 時間〔の問題〕とは別に、アソシエーションを運営するには資金も必要である。そして資金とは〔まさに〕貧しい労働者があまり持っていないものである。かれらは誰がどれくらいアソシエーションに献金したのかをめぐって争いはじめる。財源の不足も、かれらやその組織を苦しめようとする政治家の試みに対してかれらをか弱いものにしていく。たしかに貧しい賃金労働者の市民組織は、政治家と対抗する後援者との縦の関係なくして自らを維持することは難しいことに気付いている。換言すれば、Putnam が市民組織と結びつける水平的な結合は、貧困者の生活およびかれらの組織（たとえば中産階級や資本家階級のアメリカ人のボーリングクラブと

対照的な組織）を特徴づけない傾向にある。逆境にもかかわらず賃金労働者がアソシエーションを設立するとき、これらのアソシエーションが墮落した政治家に対して果たす潜在的な対抗的監視の役割を先制するために、政治政党はこれらを統制し成員間の抗争をつくりだそうとする。政治家は票を獲得するためにこれらのアソシエーションをコントロールしようとする。またある政治政党にとって、特定のアソシエーションは反対陣営のための潜在的な票田であり、ゆえにその政党はこのアソシエーション（あるいは少なくとも影響力のあるメンバー数人）を掌握しようとする。

こうして、これらすべての理由により階級および階級の結果——あるいはより一般的には、貧しい人びとが生活している経済・政治的諸条件——は、社会関係資本の生産を促進するよりもむしろ制約する。この結論は既存の地理学的・社会科学的研究によっても支持される。たとえば Meert は、もし人びとに十分な購買力がなければ、かれらにとってアソシエーションを支援することも参加することも難しいし、互酬の扶助 *reciprocal help* のネットワークの一部になることも困難である、という（2000, 328-9; Meert et al. 1997 も参照のこと）。ブリュッセル近郊のある村での互酬に関する Meert の研究は次のことを示している。

社会的ネットワークのほぼ全員に広く行きわたっている貧困を考慮すると、Houwaart の貧困世帯が財やサービスを交換する機会は…稀少である。実際、これらの世帯間の相互交換は実質的には、貧困の互酬的な交換を意味している。（2000, 333）

たしかに、先進国の文脈にある最近の研究は、労働に関わる時間的制約や貧困が市民的関与にネガティブな影響を与えていることを報告している（Price 2002）。

世界中の異なる四地域の貧しい都市コミュニティにおける互酬に関する Moser(1998)の研究はわたしや Meert, その他の研究者と同じ結論に至っている。彼女は、これらの場所における伝統的な信用手続きを発見した。その手続きによって、貧困者は隣人や近親の親戚から食べ物のような日々の消費ニーズを短期間借りる。したがって社会関係資本の有用性を

示していることになる。しかし社会関係資本は厳しい経済条件のためにすぐに触まれていく。

世帯が充分な資源をもっているところでは、現金交換や非金銭的交換における互酬は維持される。…[しかし]経済危機はこのような互酬を維持できないところまでこれらの世帯を押しやってしまった。(Moser 1998, 13)

わたしの研究は明らかに、社会関係資本は貧困者の資本である、とくに Putnam 的な意味の社会関係資本はそうであるといった楽観的な主張を支持しない。したがって Mohan and Mohan や DeFilippis その他の地理学者同様、わたしは物的不平等や階級に対する社会関係資本の利点を示そうとする社会関係資本支持者の試みに関心をもっている。手短にいうと、わたしは「社会関係資本を物的環境から切り離すこと」(Mohan and Mohan 2002, 206)、たとえば階級的コンテクストから切り離すことは不可能だと考えている。Moser や Meert のものと同様の研究にしたがって、本研究は社会関係資本の批評に関する研究(Harriss 2002; Fine 2002)の今後の発展に資することを望んでいる。既存レベルの社会関係資本を独立変数として扱い貧困を従属変数として扱うこと、あるいは貧困者の社会関係資本が長期発展のミッシングリンクだと期待することには大いに問題がある。貧困者の社会関係資本にはまったく意味がないと言っているのではない。社会関係資本は短期間の限定された扶助の一資源ではありうる。それはつねにそうであった(Harvey 1973; Polanyi 1944)。この意味において、社会関係資本という当世流行している概念が言及する社会的実践について新しいものは何もない。

ゆえに次のような疑問が生じるかもしれない。もし社会関係資本が貧困の軽減について新しくもなく有効でもない要素であるならば、いったいなぜ社会関係資本論に依拠するのであろうか。本稿の紙幅ではこの重要な疑問に応えることはできない。しかしきわめて簡潔にいうと、研究レベルにおいては二つの応答が考えられる。ひとつは社会関係資本支持者、とくに社会関係資本のもっとも熱心なプロモーターである世界銀行と関連のある者からの応答である。Bebbington らは社会関係資本に関する議論の多くが「古典的な社会科学のテーマを焼き直して」きた

こと、したがってこの議論においては「たしかに再発明が繰り返されていること」に同意する(2002, 17-18, 36)。しかしかれらは、社会関係資本は学問横断的な議論を促進すると論じる。そしてより重要なことにそれは、開発理論や世界銀行のような開発機構が権力、参加、エンパワーメントなどの問題に携わるための余地をつくりだす¹³⁾。他方において、社会関係資本に批判的な研究者は、それがあまりにも脱政治化した新自由主義的な概念であり、新自由主義を売り込みそのコストを管理するのに用いられていると論じる(Harriss 2002; Fine 2001)。したがって Fine は、「社会関係資本にたいする最適解はそれをすべて拒絶することである」(2002, 14)という¹⁴⁾。この〔社会関係資本を支持する〕研究は階級や資本を社会的過程として理解することに失敗しており（したがって「社会関係」を「資本」に付け加える必要性の理解にも失敗している）、その効果を『社会的なもの』とは『経済的』資本の〔単なる〕補完物であり、たいていの場合修正のネタ source であって、疑問や異議申し立てのそれではない」(2002, 9)としている。また、それは権力、抗争、階級を考慮に入れていない。Grootaert(1997)、Woolcock(1998)、Bebbington を含む社会関係資本支持者の多くは、これらの批判を受け入れるだろうが、しかし社会関係資本ビジネスをふたたび続行し、それを開発的思考の中心のカテゴリーとして、国際開発の新しい理論として扱うことだろう。Fine が言うように、

社会関係資本事業内での異議は社会関係資本を弱めるよりもむしろ強めているようである…。反対にたいする社会関係資本の巧妙な調節は、抑圧的な寛容を正当化する形態のきわめてうまくいった成功例である。(undated, 14)

社会関係資本の研究は「異議を取り込み、中和する」(Fine 2002, 799)。したがって本稿で社会関係資本に対して提起した概念的および経験的問題は、社会関係資本研究内で調停されるだろうと論じる者もいる。

本稿において、社会関係資本をまったく使わずに (a)互酬の規範と(b)貧しい労働者階級の人びとの社会・文化・政治的アソシエーションについて実質的な報告を提供しえただろうかと問う者もいるだろう。

わたしの答えはイエス！である。社会関係資本を使う理由はなにか。私見では、社会関係資本がなしうる唯一のことは、傘のような概念としてさまざまな社会的実践¹⁵⁾(互酬、協同生活、信頼などなど)をいっしょくたにすることである¹⁶⁾。たしかにそれは批判的実在論の意味においては混沌とした概念になっている。しかし社会関係資本だけが混沌とした概念であるわけではない。「サービス部門」は地理学や他の社会科学において広く使われている、数ある混沌とした概念の一つである(Sayer 2000, 19)。そうした概念が混沌としていることを正しく理解する限り、したがってわたしたちがそれらの概念を、時空を越えた単一の因果的力として想定しない限り、それらの使用は妥当なものになりうる。社会関係資本のわたしの使い方はこうしたことに基づいてのみ(いくぶんか)妥当なものになる。たしかに、わたしが提起した概念的課題(とくに階級および貧困を含む階級の結果が社会関係資本の生産を大いに制約しており、その事実、社会関係資本を独立変数として扱うことを大いに問題があるものにするという考え)や社会関係資本の経験的資料が示していることにもとづいて、わたしは、社会関係資本が国際開発の新しい理論を提供するという世界銀行の研究員の主張を退ける(Woolcock and Narayan 2000)。しかし社会関係資本という概念を全く拒否する代わりに、ここから想定される[今後の]わたしの戦略は批判的にそうした研究に関わることであり、その過程で概念的かつ経験的に、[社会関係資本の]因果的力は階級のそれに比べてかなり限定されていることを社会関係資本支持者に示すことである¹⁷⁾。もしこの戦略が多くの人に支持されれば、社会関係資本への強迫観念は自ずと消失することだろう。もちろん、これが Ben Fine が提案した戦略よりも良いものであるかどうかには議論の余地がある。

謝辞

本稿は、経済社会研究評議会の研究グラント番号 R000223723 の支援を得て作成された。この支援には大変感謝している。現地での二人の研究アシスタント、Mr Debadutta Sahu と Mr Nifar Swain の協力にも感謝したい。また、貴重なインタビューの時間を提供してくれた賃金労働者のみなさんやその他のインフォーマントにも大変

感謝している。最後に、論文の草稿について示唆に富むコメントをいただいた本誌のレフェリーと編集者に感謝の意をあらわしたい。

※ 凡例：[]はラジュによる註記，〔 〕は訳者による註記，原文の()は()を用いている。

原註

- 1) わたしは Corbridge and Harriss に賛成である。しかし実際には、Orissa では上流カースト/階級の支配に対する中流カースト/階級からの抵抗が幾分かあることを付け加えておく (Mohanty 1990 をみよ)。
- 2) ここで、地方の文脈[Patnaik(1999, 211-13)の階級規定の労働搾取基準をみよ]においても、階級の一般的な研究 (Sheppard and Barnes 1990; Thrift and Williams 1987 をみよ)においても階級の定義にはいくつかあるが、わたしは労働者階級をきわめてシンプルに定義していることに言及しておかなくてはならない。すなわち、労働者階級は労働力を売ることが主な収入源となっている人びとから構成されている。さらに詳細に言うと、わたしは日稼ぎ被雇用者に焦点を当てている。
- 3) これが社会関係資本の唯一の定義ではない。しかしこれについては多くの正当な合意がある (Woolcock 2000)。社会関係資本論の第一人者の1人 Coleman(1988)による社会関係資本の定義は、本稿において用いられるものよりも一般的であることを言うておくなくてはならない。彼にとって社会関係資本とは、人間の行為を支援する社会構造の側面である。
- 4) 連結型の社会関係資本とは、貧しい人びとと(州のような)公的な組織において権力と影響力をもつ人びととの垂直的な紐帯のことである(World Bank 2001)。本稿ではこれを扱わないことにする。
- 5) 社会関係資本の研究における階級の無視は、たしかに地理学や社会科学の研究、とくにポストモダニズムの影響を受けた研究における階級の無視を反映している。
- 6) これは、かなりの説得力をもって、グローバル資本主義の周縁地域の低賃金経済とより豊かな国々における労働者階級の貧困コミュニティに適用される。
- 7) 相互扶助の具体的な実践は物的な実践である。あらゆる物的な実践と同様に、たとえば労働力の売却は地理的に制約された地域において生じる傾向がある(Harvey 1985)という似通った理由で、それは場所に拘束されている。もし食べ物が必要になれば、あるいは病院に行かなくてはならなくなれば、彼女は数マイルも離れたところに住んでいる人よりも隣の人か村人に助けを求める傾向にある。
- 8) これは他のところと同様に Orissa についても真である

(Seddon 2002)。しかし不幸にもポストモダン化した左派は、このこと——(労働者)階級が混成的であること——を、階級についてまじめに話しても役に立たないという意味に捉えてきた(反論については Walker 1985 and Seddon 2002 をみよ)。

- 9) 本稿における労働者階級の社会関係資本の研究は、直接的ではないが、空間に配慮した社会学者の一人 Mike Savage(1996)が労働者の「社会・文化的階級変容」と呼ぶものに注目している。彼が言う社会・文化的階級変容とは、「継続的に連带的かつ共同的なアイデンティティを築くことを可能にする濃密な紐帯の構築のことであり、…ここにおいて階級は『コミュニティ』すなわち濃密な近隣ネットワークなどを特徴づける]対面的な関係を利用することができる」(1996, 68-9)。階級の関係は労働者階級の社会関係資本の基礎をなすが、ひるがえって後者は階級形成 class formation にインパクトを与える。わたしはこの関係の前者の側面を提示してきたが、労働者階級の社会関係資本がどのように階級形成に影響するのかを提示してこなかった。労働者の「友情…、かれらのクラブやアソシエーション[などが]、社会的階級をひとつの集合性に結晶化させる背景や態度に共通してみられる習慣をどのようにして引き起こすのか」(Scott in Thrift 1987, 26-7)。これはさらに追究する価値がある。
- 10) しかしながら言うておかななくてはならないのは、たとえこれらの著者が階級の概念化の点で異なっても、階級は分析にとって重要な社会的カテゴリーだと考える社会科学者のなかでは少数派だということである。わたしはすでに、地理学や社会科学の研究において一般に階級が無視されていることに言及している(とくに Wood 1998 をみよ)。
- 11) これがなぜ重要なのかを説明することは、本稿の枠を超えている。
- 12) 議論の余地があるものの、たとえ貧しい労働者がその労働力を集約的に用いることができ、いくらかの富を生みだすことに成功したとしても、この富は土地所有者や行政職員や政治家などといった搾取者によって領有されるだろう。この点についてはレフェリーの一人に指摘していただいた。
- 13) こうした余地をつくりだすのに社会関係資本が成功する度合いは、市場肯定派の研究者と政治経済に向かう傾向のある研究者との銀行内での言説上の争いに依拠している(Bebbington et al. 2002, 17, 37)。
- 14) 興味深いことに、経済学者の Kenneth Arrow も『社会関係資本』という言葉…の放棄を促すであろう」(2000, 4)といっている。もっとも、その拠って立つところは Fine とは異なる。
- 15) これらの実践は、これらを記述/説明するのに用いられる概念/理論から独立して存在する。
- 16) Bebbington も社会関係資本への彼の関心を説明するのにこの理由を挙げている(「社会関係資本は一種の言語上

のデバイスである)。しかし明らかにこれが社会関係資本を用いる彼の主要な理由ではないことに留意されたい(Bebbington 2002, 802)。

- 17) わたしの戦略は、「政治経済は…社会関係資本に関する議論にコンテキストや意味を[提供することができる]」そして「社会関係資本という観念は…政治と経済の結びつきに関する概念化により詳細な記述を[提供することができる]」(Bebbington 2002, 801)という Bebbington の提案と一致していると解釈されるかもしれない。しかし私見によると、社会関係資本に関するこの見方には、必ずそれを当該の政治経済のコンテキストに位置づけなければならないという主張がないので、分析を誤るかもしれない。批判的実在論からみると、たとえば賃金労働者の脆弱性がその階級的コンテキストにおける位置に依存しているのちがって、社会関係資本の因果的力はそうしたものに依存していない。たしかに、Bebbington の社会関係資本へのアプローチは非常に洗練されており(たとえば Bebbington and Perreault 1999 をみよ)、彼自身が正当にも「[社会関係資本を潜在的に構成する]ある行為者の社会関係のまとまりある構造は、階級…あるいは他の地位に容易に位置づけることはできないし、自動的にできるわけでもない」(Bebbington 2002, 801)と言っている。

参考文献

- Arrow K 2000 Observations on social capital in Dasgupta P and Serageldin I eds *Social capital: a multi-faceted perspective* The World Bank, Washington DC 3-5
- Bardhan P 1998 *The political economy of development in India* 2nd edn Oxford University Press, Delhi
- Beall J 2000 Valuing social resources or capitalizing on them: social action and limits to pro-poor urban governance Partnership and Poverty working paper 19 University of Birmingham
- Bebbington A 2002 Sharp knives and blunt instruments: social capital in development studies *Antipode* 34 800-3
- Bebbington A and Perreault T 1999 Social capital, development, and access to resources in Highland Ecuador *Economic Geography* 75 395-418
- Bebbington A, Woolcock M, Guggenheim S and Olson E 2002 Grounding discourse in practice: exploring social capital debates at the World Bank mimeo
- Biggart N and Castanias R 2001 Collateralized social relations: the social in economic calculation *American Journal of Economics and Sociology* 60 471-500

- Buck D 2000 Growth, disintegration, and decentralization: the construction of Taiwan's industrial networks *Environment and Planning A* 32 245-62
- Callinicos A 1988 *Making history: agency, structure and change in social theory* Cornell University Press, Ithaca
- Christerson B and Lever-Tracy C 1997 The third China? Emerging industrial districts in rural China *International Journal of Urban and Regional Research* 21 569-88
- Coleman J 1988 Social capital in the creation of human capital *American Journal of Sociology* 94 S95-S120
- Cooke P 1985 Class practices as regional markers: a contribution to labour geography in Gregory D and Urry J eds *Social relations and spatial structures* Macmillan, London 213-41
- Corbridge S and Harriss J 2000 *Reinventing India: liberalization, Hindu nationalism and popular democracy* Oxford University Press, Delhi
- Cox K and Mair A 1988 Locality and community in the politics of local economic development *Annals, Association of American Geographers* 78 307-25
- Das R 1998 The social and spatial character of the Indian state *Political Geography* 17 787-808
- Das R 2001 The spatiality of social relations: an Indian case-study *Journal of Rural Studies* 17 347-62
- Das R 2002 The green revolution and poverty: a theoretical and empirical examination of the relation between technology and society *Geoforum* 33 55-72
- DeFilippis J 2001 The myth of social capital in community development *Housing Policy Debate* 12 781-806
- DeFilippis J 2002 Symposium on social capital: an introduction *Antipode* 34 790-5
- Fine B 2001 *Social capital vs social theory* Routledge, London
- Fine B 2002 They f**k you up those social capitalists *Antipode* 34 796-9
- Fine B undated It ain't social, it ain't capital and it ain't Africa School of Oriental and African Studies, University of London mimeo
- Gertler M 1995 Being there – Proximity, organization, and culture in the development and adoption of advanced manufacturing technologies *Economic Geography* 71 1-26
- Gibson K and Graham J 1992 Rethinking class in industrial geography – creating a space for an alternative politics of class *Economic Geography* 68 109-27
- Giddens A 1987 *Social theory and modern sociology* Polity Press, Cambridge (藤田弘夫監訳, 1998年『社会学理論と現代社会学』青木書店)
- Gilbert M 1998 'Race', space, and power: the survival strategies of working poor women *Annals of the Association of American Geographers* 88 595-621
- Gittel R and Vidal A 1998 *Community organizing: building social capital as a development strategy* Sage, Thousand Oaks
- Grootaert C 1997 Social capital: 'the missing link' in *Expanding the measure of wealth* World Bank, Washington DC
- Harriss J 2002 *Depoliticising development: the World Bank and social capital* Anthem Press, London
- Harriss J and De Renzio P 1997 Missing link or analytically missing?: The concept of social capital *Journal of International Development* 9 919-37
- Harvey D 1973 *Social justice and the city* Johns Hopkins University Press, Baltimore (竹内啓一, 松本正美訳, 1980年『都市と社会的な不平等』日本ブリタニカ)
- Harvey D 1985 *The urbanization of capital* Johns Hopkins University Press, Baltimore
- Holzmann R and Jorgensen S 1999 Social protection as social risk management Social Protection Discussion Paper no 9901 The World Bank
- Kennedy B, Kawachi I and Brainerd E 1998 The role of social capital in the Russian mortality crisis *World Development* 26 2029-43
- Kozel V and Parker B 1998 Poverty in rural India: the contribution of qualitative research in poverty analysis The World Bank mimeo
- Levi M 1996 Social and unsocial capital: a review essay of Robert Putnam's *Making democracy work* *Politics and Society* 24 45-55
- Massey D 1999 Spaces of politics in Massey D, Allen J and Sarre P eds *Human geography today* Polity Press, London 279-94
- McDade B and Malecki E 1997 Entrepreneurial networking: industrial estates in Ghana *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie* 88 262-72
- Merrit H 2002 Rural community life and the importance of reciprocal survival strategies *Sociologia Ruralis* 40 319-38
- Meert H, Mistiaen P and Kesteloot C 1997 The geography of survival: household strategies in urban settings *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie* 88 169-81
- Mohan G and Mohan J 2002 Placing social capital *Progress in Human Geography* 26 191-210
- Mohanty M 1990 Class, caste and democracy in a

- backward state: Orissa in Frankel F and Rao M eds *Dominance and state power* Oxford University Press, Delhi
- Molina-Morales F, Lopez-Navarro M and Guia-Julve J 2002 The role of local institutions as intermediary agents in the industrial district *European Urban and Regional Studies* 9 315-29
- Moser C 1998 The asset vulnerability framework: reassessing urban poverty reduction strategies *World Development* 26 1-19
- Narayan D and Pritchett L 1999 Social capital: evidence and implications in Dasgupta P and Serageldin I eds *Social capital: a multi-faceted perspective* The World Bank, Washington 269-95
- Patnaik U 1999 *The long transition: essays on political economy* Tulika Press, New Delhi
- Pinch S and Henry N 1999 Discursive aspects of technological innovation: the case of the British motor sport industry *Environment and Planning A* 31 665-82
- Polanyi K 1944 *The great transformation: the political and economic origins of our time* Farrar & Rinehart, New York (吉沢英成ほか訳, 1975年『大転換: 市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社)
- Portes A and Landolt P 2000 Social capital: promise and pitfalls of its role in development *Journal of Latin American Studies* 32 529-47
- Price B 2002 Social capital and factors affecting civic engagement as reported by leaders of voluntary associations *Social Science Journal* 39 119-27
- Putnam R 1993 *Making democracy work* Princeton University Press, Princeton NJ (河田潤一訳, 2001年『哲学する民主主義: 伝統と改革の市民的構造』NTT出版)
- Putnam R 2000 *Bowling along: the collapse and revival of American Community* Simon and Schuster, New York
- Savage M 1996 Space, networks and class formation in Kirk N ed *Social class and Marxism* Scolar Press, Aldershot
- Sayer A 2000 *Realism and social science* Sage, London
- Seddon D 2002 Popolar protest and class struggle in Africa: a historical overview in Zailig L ed *Class struggle and resistance in Africa* New Clarion Press, Cheltenham 24-45
- Sheppard E and Barnes T 1990 *The capitalist space economy: geographical analysis after Ricardo, Marx and Sraffa* Unwin Hyman, London
- Smith N 2000 What happened to class? *Environment and Planning A* 32 1011-32
- Thrift N and Olds K 1996 Refiguring the economic in economic geography *Progress in Human Geography* 20 311-37
- Thrift N and Williams P 1987 The geography of class formation in Thrift N and Williams P eds *Class and space: the making of urban society* Routledge, New York 1-22
- Uphoff N 1999 Understanding social capital: learning from the analysis and experience of participation in Dasgupta P and Serageldin I eds *Social capital: a multi-faceted perspective* The World Bank, Washington DC 215-49
- Walker R 1985 Class, division of labour and employment in space in Gregory D and Urry J eds *Social relations and spatial structures* Macmillan, London 164-89
- Wood E 1998 *The retreat from class* rev edn Verso, London
- Woolcock M 1998 Social capital and economic development: toward a theoretical synthesis and policy framework *Theory and Society* 27 151-208
- Woolcock M 2000 Social capital in theory and practice: where do we stand, paper prepared for the 21st Annual Conference on Economic issues (<http://www.worldbank.org/poverty/scapital/index.htm>) Accessed 10 August 2003
- Woolcock M and Narayan D 2000 Social capital: implications for development theory, research, and policy *World Bank Research Observer* 15 225-49
- World Bank 2001 *World development report 2000/2001* World Bank, Washington DC (西川潤, 五十嵐友子訳, 2002年『世界開発報告 (2000/2001) 貧困との闘い』シユプリンガー・フェアラーク東京)

表 1 対象地域：インド東部の Remuna 村と Chasakhanda 村

	Remuna	Chasakhanda
1. 総人口(2001年)	10669	9064
2. 総人口に占める登録されたカーストおよび部族*の%	28.5	43.3
3. 経済発展 (1ヘクタールあたりの水田の収穫量(単位 100kg))	26.9	18
4. 1000人あたりの市民組織**の数 (自助集団***を含む)	3.01	1.82
5. 1000人あたりの市民組織の数 (自助集団を含まず)	0.85	0.48
6. 地方選挙(たとえば Panchayat)で 左派政党に投げられた投票率(%)	22.28	12.97

注記：

* インド社会の最下層に占めるこの集団の存在はしばしば貧困に近似するものとして使われる。

** ここには登録されたクラブ、ボランティア組織、若者クラブ、女性組織、図書館、労働組合が含まれる。データは区レベル(複数の村が一つの区を成している)のものである。

*** 集会的に毎月いくらかの金額を貯蓄し、小さなビジネスに携わるために政府からローンを受けている女性の集団をさす。この集団は時折自らをエンパワーメントする他の活動にも携わっている。

典拠：Remuna および Chasakhanda 地方開発局

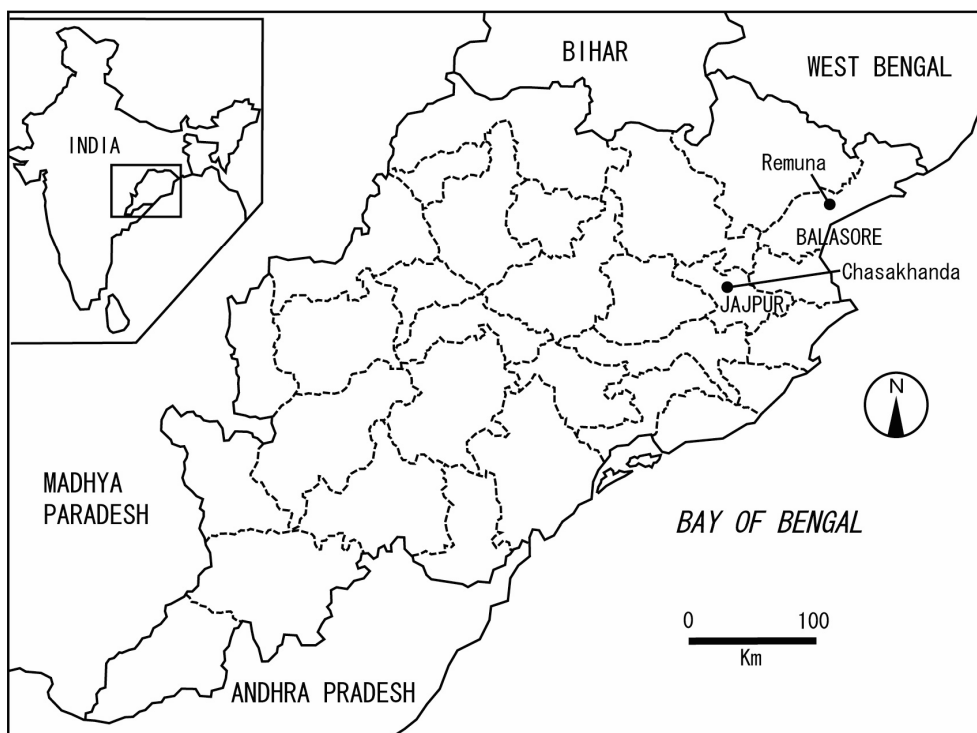


図 1 対象地域